

特定領域研究 「古典学の再構築」の概要

1 「古典学の再構築」の必要性

1. 古典の持つ意味 新鮮な触発力

人類の文明は過去に蓄積された知識の総体の上に成り立つのであるから、人間と世界に関する精選された知識の集成である「古典」の持つ意味は、とりわけ重要である。

そこに語られる崇高な人格や、高邁な思想、透徹した人間理解や、明晰な論理は、ある時には尊崇の対象、学ぶべき規範であった。また人間の運命にたいする感慨や願望は、慰めや癒しの源泉であった。

しかし古典の読解は、受動的行為にとどまらない。古典は、常に新鮮な触発力によって高次の認識へと人を誘う。人の問いに応じて新しい視野を開かしめ、固定した現状理解を溶融して未来への展望を強く促す触媒の働きをなすものである。古典との対話は、謂わば新たな我々自身の発見と世界認識の創造である。古典が長期にわたり、それぞれの文明世界の文化的根幹を成し、人々の思想や感性の骨組みを形成してきたのは、このような過程を通じてであると考えられる。

古典学は、こうした人類の卓越した精神活動の記録を収集し、保存し、究明するという重要な責務を担った学術的営為である。本特定領域研究「古典学の再構築」は、この古典学の将来的基盤を築くため、日本の諸古典学が、連携して、自らを再構築しようとするものである。

2. 現代古典学の課題

古典諸学の連携による古典学の再構築

近代古典文献学は、19世紀初頭、古代ギリシャ・ラテン文献を対象としてヨーロッパに確立された。その方法論は、まもなくイスラーム学、イスラエル学、インド学、中国学、チベット学などに適用され、ここに、諸領域の

近代古典学が成立する。

我が国には、明治中期以降、ヨーロッパから順次移入され、今日では、我が国の諸古典学は、高水準の研究によって国際学界の一翼を担うに至っている。

このように我が国に確固とした基盤を持つ古典学であるが、近年、次の3点が重要課題として浮上してきた。本特定領域研究はこれに対応するものである。

- 1) 最近半世紀の成果の総括と新方法論の確立
- 2) 主要テーマに関する諸領域の研究成果つき合わせ
- 3) 社会の中の古典および古典学のありかたの将来的展望

以下、これらの課題と、本特定領域研究における取組みを述べる。

(1a) 最新成果の総括

古典学においては、最近半世紀間に、膨大な写本・刊本の校訂と研究が行われたが、その総覧と評価は、いずれの領域においても手薄である。それは、古典学者が個々の原典研究に忙しく、総括作業はともしれば後回しにされることにもよるが、主として、組織的かつ定期的にこれを行なう仕組みが学界に不十分であることによる。

しかし古典学の将来的方向を定め、よりよい発展を計るためには、総覧と評価は不可欠である。本特定領域研究は、これを学界として組織的に行う仕組みを諸領域が共同して検討し、また実際にそれを実施しようとするものである。

ただし評価は、次に述べる方法論的反省とともに行われなければならない。

(1b) 方法論的反省

古典学および現代世界の発展にともない、古典学の方法論は見直しが必要となった。それは読解法と情報処理技術の2側面からの見直しである。

1) 古典はいずれの文明においても口承あるいは写本として伝承されるから、その技法研究は、現状の如く個々の原典ごとになされる研究では不十分であり、一般写本学として確立されなければならない。また近代西洋古典学から借用された諸古典学の方法論には、近代西欧文明的価値観、例えば、精神(テクノロジー)による肉体(自然)の制御や、合理性・機能性のみ追求、非キリスト教思想の軽視等が潜むことがある。読解に際しては、この西欧近代特有の価値観を排し、諸文明本来の論理を解明しなければならない。また西洋古典学自体においても、西欧の諸概念について古典的反省を通して「訳語」レベルでの再検討が必要である。あるいはまたインド仏典は、その漢訳熟語中に潜む中国仏教ないし日本仏教的観念を払拭して、インド文明自体の文脈で理解されなければならない。読解作業は一つの語彙や文章を対象とするが、そこには、文明の論理体系全体の解釈に関する方法論が必要である。

2) 最近10年に起こったパーソナル・コンピュータの普及は、古典学の方法を根本的に変え、古典学に質的变化をもたらした。しかしこの新技術の利用に関しては、現在のところ、領域間、研究者間に著しい差がある。その顕著な効果に鑑み、古典学に特化されたコンピュータ利用法の確立と普及は、今後の古典学発展の鍵を握ると言える。人文研究におけるコンピュータ利用については、現在特定領域研究「人文科学とコンピュータ」(平成7年度～10年度・及川昭文領域代表)が進行しているが、本特定領域研究は、この特定領域研究の成果を引き継ぎ、諸古典学の連携により、文字コード、文書整形法、文書分析法を始めとするコンピュータ利用技術の古典学における標準確立に努める。またコンピュータを利用した研究成果の評価、普及を行う。

以上のように本特定領域研究は、2世紀前に共通の方法論に依って出発した諸古典学が、互いに連携しつつ、それぞれにふさわしい新方法論の確立を目指す。

(2) 諸領域研究成果のつき合わせ

新特定領域では、これまで極めて手薄であった諸領域の研究交流を計る。

もとより古典学は、原典の厳密な読解の上に成立する。写本の収集と校合、言語学的批判、語彙史、思想的吟

味等に基づく読解の正確さに依ってこそ、原典理解がありうる。古典学者は、文明が異なれば論理が異なり、その理解には訓練と知識の集約が必要であることを考慮し、領域内部の研究に専念して、外部に関しては必要な限りの部分的参照にとどめてきた。

しかし、古典の読解と伝承過程究明を課題とする古典諸学は、多くの共通する研究主題を有する。本特定領域研究では、各文明固有の論理の翻訳・解説の困難さに配慮しつつ、諸領域間の近似した主題の研究をつきあわせ、方法論や読解内容の検討を行う。「写本・刊本研究」、「本文批評と解釈」、「古典の世界像」、「古典の伝承と受容」等のテーマごとに、諸領域の古典研究者が直接対話して、方法論的、内容解釈的吟味を行い、新方法、新解釈の可能性を探る。

(3) 古典および古典学のありかたの将来的展望

古典学の持つ意味と、将来のあり方を考察する。そのために先ず、古典が果たした、あるいは現在果たしている役割を明らかにする。ことに、中国文化、インド仏教文化、西洋文化を摂取してきた日本において、現在望まれる古典的教養とは何かを検討する。従来この種の研究は、主として社会学、政治学、経済学、歴史学の専門家が行ってきたが、本特定領域研究では、古典学者が、歴史学、法学等の専門家とともに、古典の社会における役割を歴史的に跡付ける。古典の役割が明らかになれば、古典学のあるべき姿もそれに依って定まるであろう。

古典学のありかたに関しては、定期的に諸古典学が話し合いを持ち、大学等の研究機関における古典研究の将来像、古典学の場の確保、後継者の育成などを連携して検討すべきであろう。このような継続的な古典諸学交流の方策を考案することも、本特定領域研究の重要な課題である。

3. 特定領域「古典学の再構築」の特徴

(1) 古典学の連携 普遍的古典学に向けて

史上初めて全主要領域の古典研究者の対話の場を創ることが、本特定領域研究の第1の特徴である。

先にも述べたように、1文明の理解には膨大な知識を要することから、古典学者は従来、諸文明の比較については慎重であった。文明体系全体の理解を欠いた比較や一面的理解には意味が乏しいからである。

しかし、多くの共通テーマのもとに同じ古典という素

材を扱う古典学のあいだで、対話のないことは極めて不自然である。翻訳や解説に拠る伝達の困難は確かに存在するが、それを考慮しつつ、諸領域が方法論的検討を連携して行い、共通するテーマの研究をつきあわせるならば、諸領域に新視点が生じ、研究の格段の活性化が起こるであろう。古典学はこれによって初めて1領域の古典学から、他の領域に開かれた、謂わば普遍的古典学となる。

またこの動きは、究極的には、世界的に未成立の一般古典学の確立を目指すことにもなる。

本特定領域研究では、このような考えのもとに、初の古典諸領域の連携を計るだけでなく、その連携を恒常的に保証する組織づくりを行う。

(2) 「新しい古典像」の提示 学的成果と日本語訳の公開

新領域研究の第2の特徴は、「新しい古典像」の社会的提示の重視である。これは、(a)「わかりやすい形の学的成果の提示」、(b)「わかりやすい文体による古典の日本語訳」、から成る。

(2a) 学的成果の提示

異なる領域の研究者間の対話には、専門家以外にも理解可能な言葉による研究成果の発表が不可欠である。本来研究成果の発表は原則としてそうでなければならないが、現況はそれに悖ることが多い。

これは古典学以外の学界、あるいは一般社会にも有用である。ことに古典の価値や古典学の将来像についての議論は広く公開したい。

従って、学術雑誌はむろんの事、新聞、テレビ、インターネットなどのメディアを通じ、また国際シンポジウムなどの企画によって、積極的な公開を行う。

(2b) 古典の日本語訳

近代的な書き言葉としての日本語は、明治以来、多数の人々によって工夫され、彫琢されてきた。しかし言葉は時代とともに変化し、現代にふさわしい日本語に翻訳されていない古典作品も少なくない。活字離れが言われる今日、読者をひきつけ、かつ正確な日本語訳の提供に、古典学界全体が共同して取り組むべきであろう。このような構想の下に、『古典選集』(仮題)の刊行を企画している。また、最近出版が開始された古典叢書については、本特定領域研究の目的・目標と整合するものがあれば、

連携をはかり、積極的に支援することとする。

4. 新領域の意義

(1) 日本社会にたいする貢献 古典的教養の形成

第2次世界大戦後半世紀を経て、今日の日本は転換期を迎えようとしている。日本の伝統的倫理が基盤を失ってゆく一方で、明治以来鼓舞されてきた、個の自覚に基づく普遍的モラルも、なお確たる地歩を占めるに至っていない。多くの人々は横溢する情報の中で、未来社会に対する見通しを欠いた、漠とした閉塞感の中にいるようである。

こうした時期にこそ、古典を読み返す必要がある。諸民族の思考法や感性を根源において理解すること。そして既存の枠組みを超えた視野から、現代日本や世界のあり方を捉え直し、人がよりよく生きることとは何かを追求すること。このような営為は、古典を通じてこそ可能であり、古典による深い知識と洞察力の涵養が、日本人の思想的、感性的骨組み形成には必須である。

21世紀の日本を作る若者の古典的教養の育成に貢献することは、古典研究者の責務の一つであろう。本特定領域研究は、この種の貢献に必ずしも積極的でなかった従来の古典学のあり方を反省し、学的成果と新しい日本語訳の提示によって、日本の重要課題である、日本人の思想的、感性的支柱の再構築に貢献することを視野に置くものである。

なお、長期的視野に立てば、このように世界の諸文明の古典を摂取することは、日本が過去において中国文化を数世紀にわたって吸収し、文化的水準を一段と高めたごとく、日本文化を一段と高次のものに導くと考えられる。

(2) 原典資料の散逸の危険性

世界各地における近年の社会変動、国土開発などにより、多くの写本や刊本が散逸、消滅の危機に瀕しており、その調査、保存措置は緊急を要する。価値と緊急性を古典学全体の立場から評価し、最も緊急を要する重要な原典については、本特定領域の枠内で可能な限り保存策を援助したい。

一度失われたものは二度と戻らないから、この措置の重要性は言うまでもない。